

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和5(2023)年
2月号
通巻630号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和5年2月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



▲ヒヨドリ



▲カワラヒワ



▲モズ



▲マミチャジナイ



▲クロジ



▲オオルリ

茂庭の里山にて、野鳥のスケッチ

宮城県仙台市 大沼久美子さん絵(文・7頁)

再録 昭和30(1955)年12月1日発行『大倭』第19号より

神意のままに定まれるわが道を行く

法主 矢追日聖(満43歳)

父・母・日聖、各自の使命

来る十二月二十三日は日聖の満四十四歳に当たる誕生日である。当然めぐり来るべき日が来るのであるが、回を重ねる年毎に何時も日聖を生みこの日まで育み下された御両親に対しては、新たな感謝と感激の念のいよいよ深くなりゆくを覚えるのである。

父は七十二歳、母は六十九歳、共に今も御健在にまします。私情ではあるが、子としてこれ程嬉しいことはない。望む所はさらに健やかにして一日たりとも御長命を祈る心や切なるものがある。

日聖が天賦の使命に添った活動が顕著になればなるほど痛切に思うことだが、この使命達成の軌道に乗るまで、陰となり陽となつて時には親子の私情まで抹殺して御育成、御協力下さった御両親らが、各自が持つ使命の自覚をはっきり認識され、それを実生活の中に生かしてこられたということである。こうした家庭的環境が、日聖自ら先天的大使命の自覚を早め、そしてそれが何の故障もなく今日の日を迎えさせたのである。かく大乗的見地に立つて父母を眺めた時、言語に絶する感謝の心が湧いてくるのではあるが、さらに動かすことのできない神意の絶対性には恐畏の外はない。

父には父の、母には母の、日聖には日聖の神が定め給う使命がある。その使命たるや各自相異れども、そこには不可思議なる一貫性が存している。それが所謂

1日 おほやまと 第19号

紙聞機

大倭

本誌編集者 大倭教

発行所 大倭教事務局 大倭教事務局
〒952-8574 新潟県新潟市東区大倭
大倭教事務局 大倭教事務局
〒952-8574 新潟県新潟市東区大倭
大倭教事務局 大倭教事務局
〒952-8574 新潟県新潟市東区大倭
大倭教事務局 大倭教事務局

大倭教事務局 大倭教事務局
〒952-8574 新潟県新潟市東区大倭
大倭教事務局 大倭教事務局
〒952-8574 新潟県新潟市東区大倭
大倭教事務局 大倭教事務局

大倭教事務局 大倭教事務局
〒952-8574 新潟県新潟市東区大倭
大倭教事務局 大倭教事務局
〒952-8574 新潟県新潟市東区大倭
大倭教事務局 大倭教事務局

奈母太加天腹 神示 拍手合掌

恩を知るは、恩に報ゆることである。上代の聖者偉人の靈魂を正しく鎮め奉り、その遺徳を顕彰することは吾國隆昌の基礎的的重大事である。亦た、各家庭に於ける崇祖的信仰は家の繁栄を招来する必須の要件である。

神意のまにまに 定まれるわが道を行く

○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○

古墳は高貴人の

○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○

地下水

○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○



因縁とか宿命とか言うのであろうが、父なくして母の使命が全う出来ず、父母なくして日聖の使命もまた不可能であった。父母の使命こそ日聖が立つ礎の存在である。

埋もれる御陵墓の被葬者顕彰

十二月四日の金鶏祭(金鶏発祥、平和瑞光発現の記念日)から、年明けた二月二十三日の申孝祭(神武天皇鳥見において金鶏の神霊に対する御親祭祀念日)の間において、自然に具体化してくる問題が、大倭の神意によって起こってくるもので

ある。小さくは個人に関する事柄から、大きくは大倭教の生命の問題に至るまで、毎年この期間に処理されてゆく。本年の浮かび上がった問題は次の三つである。

- 一、埋もれる御陵墓の被葬者顕彰に関する事柄。
- 二、救護施設、大倭安宿苑創設のこと。
- 三、日聖の現住居「瑞光庵」改築のこと。

第三の問題は一時的な仕事に過ぎないが、第一と第二は昭和三十年から系統的になさねばならぬ重大事である。

百舌鳥耳原「イタスケ古墳」

○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○ ○

第一の「埋もれる御陵墓の被葬者顕彰」の問題もいよいよ世に出すの時機が到来したようである。堺市百舌鳥の「イタスケ古墳」が、今や古文化財保護の立場において社会的に重く取上げられ世人の関心を集めている。理由の如何に関わらず古墳を保護保存することは至上の喜びとする所である。法主としてこの世に生を受けた使命は、勿論正しき宗教家として人間の精神を治め現世衆土建設にあるが、反面、現界を治めるには幽界に存する姿なき人間の靈魂を鎮定しなければなるまい。幽界に在っても現界に似た人間社会(あるいは神霊社会)があつて、常に顕幽表裏一体の因果関係を繰り返しているのである。

幽界における霊格の高き者はそれ相応の霊作用、霊能力を持っているので、現人間社会に及ぼす影響も大きい。こうした霊格の高き者の殆どが、今問題になっているイタスケ古墳の如く、高塚式の墳墓に葬られている。今この被葬者が過去のいかなる人物であつたかを見出し、その靈魂を鎮め奉る所に幽界現界共に一歩と和の世界が現出してくる。

○ ○ ○ ○ ○

右のような観点に立つて不明の古墳の被葬者を顕彰し決定してゆくのではあるが、恐らく現社会通念からすれば、特に科学者、考古学者等から見れば狂人の沙汰との冷笑を浴びることは覚悟している。けれども日聖は天賦の使命のなすがまま、この問題に関して狂人として進みたい。それは心靈科学が社会の常識化する時代までの辛抱である。その時は狂人の位置が変わるだろう。

今の所、この被葬者の決定には母の霊能力を借りなければならぬ。これは一面母の使命でもある。

日聖は主に霊波によって霊界を探知してゆくのであるが、母は霊界の様相が見え、会話が出来る。特に古代の事物に関しては大倭神宮鎮座、奇稲田姫命よりの御神示がある。誠に稀有な重宝な神通力である。こうしたことは母の主観に属することでもあるので、日聖は過去二十余年の間、母の霊能の真疑について、あらゆる角度から日聖の霊能を通して研究精査を試みてきたが、結果、その確実性を認め自信を以て世に発表する時が訪れて参つたのである。

御陵墓に関する御神託は、大正十四年二月十一日紀元節の日大倭神宮において、長慶天皇御出現になり、勅して宜う。

「余ハ都ヨリ北ニ降レリ 我レノ御陵ハ青森ニアリ霊地」

続イテ陸奥ニ遁レ給フ実相現ハル。

これが初めてである。同年十二月九日、父はこの件につきて単身上京し、宮内省諸陵寮に上申さ

れたのであるが、時機尚早か神威は認められなかつたようである。ここに星霜満三十年、日聖が父の跡を継いで立つ時がどうやら訪れたようであ

百舌鳥耳原「イタスケ古墳」 履中天皇の皇后御陵

矢追日聖

一、はしがき

昭和三十年十一月七日付、朝日新聞夕刊に「古墳を護ろう」という大々的見出しのもとに、大阪府下堺市百舌鳥耳原の古墳群中「イタスケ古墳」を挙げて破壊寸前その保護の焦点として、世に問題を投げかけた。これは独りイタスケ古墳に限らず、全国各地に散在するこの種遺跡の保護にまでその救済の手を差し伸べてくれるよう心から念願して止まない。

- 保護の目的とする所を大別すれば、
- (一) 上代文化解明の資料としての遺跡遺物であるがため。
- (二) 上代における高貴な方の奥津城(墓)であるがため。

今社会的に問題化しているのは第一に属する。原始時代の歴史はこの古墳が唯一の研究資料であるがため日本の上代文化の研究にはなくてはならないものである。

第二は宗教的立場に立つての問題である。即ち奥津城として葬られている被葬者の靈魂を鎮めまつり、その遺徳を顕彰する所にある。現今の史学、考古学等を専門とする科学者には、この時代の古墳の被葬者やその御事蹟等を研究する領域はな

る。
※再録にあたり全体的に、文字等は現代的にしています。
(編集部)

い。勿論こうしたことを知るべき、また研究すべき確たる文献的資料は皆無といつて、敢えて過言ではあるまいと思うからである。

日聖は今ここに神霊科学(大系は立てていないが、この名称を仮に使用する)の立場において、被葬者を世に発表する好機の到来を予知したがため、科学者の罵倒嘲笑を覚悟しながらも大胆率直に記述することにした。しかし被葬者を肯定する何ら史学的資料は見当たらない、といつて被葬者を否定する科学的根拠もあろうはずはない。

二、御神託

昭和三十年十一月十八日大倭神宮に於いて、日妙(日聖の母、六十九歳)に「イタスケ古墳」の被葬者に関して神宣を伺わしめた。

霊界ノ実相及ビ御神託

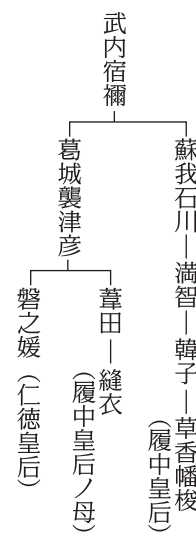
奇稲田姫正座ニ御出現。次イデ仁徳天皇、履中天皇、暫クシテ、高貴ナ姫方前ニ現ワレ給ウ。(日妙コノ姫君ハト思エバ)奇稲田姫命「仁徳皇后」ト宣イ、文字ニテ「磐之媛皇后」ト示サル。最後ニ若キ美麗ナル御姿正装マバユキ姫君ガ静カニ現ワレ給ウヤ、奇稲田姫命「履中皇后霊地(御陵ノ意)」ト宣イ、文字ニテ「草香幡梭皇后」ト示サル。

御事蹟

皇后ハ蘇我韓子ノ御女ニマシマシ、御母ハ葛城葦田ノ御女縫衣(ホウイ)、十七歳ニシテ妃トシテ宮ニ入ラセラレ、天皇即位二年十月十八歳ニシテ皇妃ニ立タセラル。特ニ容姿端麗ニマシマス。御寿五十九歳、天皇ヨリ先ニ崩セラレ。天皇三十八歳ニシテ即位、御寿八十一歳ニテ崩御サル。

「御所生」

磐坂市辺押磐皇子、御馬皇子、草津姫。奇稲田姫命、皇后ノ系譜ヲ示シ給ウ。



縫衣ニ就テ御神託ノ概要

最初現ハレタ姿ハ、頭髮ヲ上ニ巻キ、韓国ノ服装デアル。

主ナル事蹟

早くヨリ韓国ニ渡リ機織リ(ハタオリ)及裁縫ノ技術ヲ修得シ、帰国シテカラ多クノ人々ニコレヲ伝エ、教エラレタ。コレ我国ノ機織リノ祖デア

以上でイタスケ古墳の被葬者に関し、必要とする範囲における御神託があった訳である。霊界に御出現になった諸神霊はいずれもその被葬者たる履中皇后に関連性を持つお方ばかりである。御所生の御三子はお示しになった文字のままを

記載したのである。

皇后御生母、葛城縫衣について、あるいは御神示がないかも知れないと思ったのだが、お示し下さって有難かった。

三、むすび

イタスケ古墳は「履中天皇の草香幡皇后の御陵」であるとの神示があったので、日聖は神示を信ずる故に皇后御陵と確定するのであるが、今の所、科学者としてこれを根本的に打開する史的資料はないのであるからこの問題については暫く目を閉じて放任してほしい。

日聖はイタスケ古墳に参詣する時はこの古墳が皇后の霊地であり、それと同時にこの古墳が皇后を奉祀する神宮として拍手を打ち礼拝して、永年埋もれます御神霊を世に出すことによつて御慰藉申し上げるものである。

履中皇后に関しては、今回の神宣と正史によつて公認されている種々な事柄についてはそこに大きな開きがある。勿論正史といえども上代に属する歴史事実の問題からすれば、これも研究の余地が十分あることだから盲信することも慎まなければなるまい。

日聖は一応認められている上代の歴史についてはたとえ、それが架空的なものであるにせよ今日まで伝えてきた伝承として尊敬し否定もしない、だが信ずることにおいて、躊躇する。

この御神示の中において日聖は、ただこの古墳が「履中天皇の皇后御陵」であるということが公に認められる日の来るを千秋の思いで待ち、念願するのみで、その他の神示については文献学的史学者が如何に批判しようとい聖は問題にしていないのである。
(昭和三十年十二月一日記)

地下水

古墳は高貴人のお墓

矢追 日聖

古墳に関しては案外知る人が少ない。最近イタスケ古墳を護ろうという声が全国的に波及しているので「古墳とは何であろうか」と耳を傾ける者も多くなつてきた。かつて学術的発掘を行われた「月の輪古墳」が映画化されたことも大いに意義あることと思う。

奈良県や大阪府等には高塚式の古墳は無数に存在していたようだが、その殆どは耕地に、住宅にと破壊の道をたどっているが、今なお遺っているものも相当数に上っている。有名な近鉄奈良線にある瓢箪山稻荷社の御本体たる背後の小さき山、かつて走る白狐の像を立ててあつた所謂瓢箪型の山は、上代の前方後円墳で小さき濠がその周囲にある。後円部にある石室の口が今も露出しているのであるが、多くここに参詣する人達もこの御本尊が上代の古墳であることに気がついていないようだ。

× × ×

古墳は上代皇族、貴族や特権階級の遺骸を埋めたお墓である。言葉を変えれば現日本人の多くの人達の先祖の墓である。従つて氏神として造られた神社と古墳はその内容において相一致するものがある。

文献的資料に乏しいこの時代を知るには、古墳は唯一の重要文化財であるは申すまでもない。こういう意味から我らの祖先のお墓、即ち古墳の学術的発掘は行われているのであるが、勿論これは上代における文化解明には大いに役立ち、一面無名の祖先の業績を称えることになり、ひいてはまた民族の誇りにもなるが、一度破壊された遺跡は永遠に昔日の姿には戻らない。

古墳を築造された当時を想像すればどうだろう

か。延べ何千何万人が、土を運んで高塚を造り遺骸を安置する石室にまで色々と技工を施し、手の込んだ石棺、木棺や漢式鏡を始め武器武具や日用品、埴輪の類まで埋葬し、あるいは遺骸を埋める葬礼式は実に荘厳を極めたものに相違あるまい。しかし千有余年の年限が被葬者が持つ徳望、社会的地位または権力、数々の業績、それに血縁縁故者及び一般社会人が死者に寄する情的な真心、そしてその行為等、荒野に横たわる古墳の中に秘めたまま哀れにも今の人々の心からすつかり葬りさらしめた。僅かに当時の人が副葬品として収めた遺物にだけ、現在人が望む上代文化財としての生命のみ存するに留まる。

× × ×

記憶新たなる大正天皇、多摩御陵を今誰かが発掘し、その跡に住宅を建てたと仮想した時、あるいは千年先において明治天皇、桃山御陵がイタスケ古墳と同じ運命下に置かれた時を、現代認識を以て想像すればよく分かる所があると思う。

被葬者の霊は永遠不滅にしてそれら古墳に鎮まつている現魂の存するお宮である。今仮にこうした墳墓を地ならして住宅を構えたとしても、必ずや初代ないし三代目頃、靈威に負けて不幸な境遇に陥ることは定まつている。それは大抵の場合、病氣と経済難その他で死に絶えることが多い。また地方の発展のためにといった目先の利用価値に囚われ、靈魂の尊厳恐れを知らずしてもしこの挙に出たとするならば、これの何倍かにも勝る物質的な経済的な損失が次々と起こってくる。

これはおどかし文句ではない、靈界の動きが現界に顕われてくる自然現象であるから、今ここで理屈を並べる問題ではない。必ずや近くこうした問題を解決してくれる偉大なる科学者の出現を信じて疑わない。
(昭和三十年十一月二十七日記)

私の家の歴史

「先祖」「因縁」をキーワードに

埼玉眞蓮田市 冬崎 流峰

本当に不思議だなあ、というか導かれているなあというか……。

この稿を引き受けることになったおかげで、この2か月、「先祖」「因縁」みたいなところをキーワードにたくさんの気つきを頂いてきている私!! いわゆる無宗教の家庭で育ち(母親はその実家の関係からか、一時期キリスト教に熱心であったのに、私の小学生2、3年の頃突如としてその世界から完全撤収した。その経緯を知りたかったのだが、その前に突然の病でもう聞けない世界へ行ってしまった)。仏壇も神棚もない環境にいたためか、「先祖」「因縁」ワールドは、私にとって遠いうすらばけたものだった。「人間解放」とかわめて突っ張っていたヒッピーかぶれの青春時代の私にとって、そういう世界は、まさに縁遠いものだった。

それが、何故か、というか、今思えば必然的だったんだと思えるいろいろな出来事があった。「先祖」「因縁」ワールドが常に身近に当たり前に在る今がある。偶然と思っていた沢山の出会いや出来事は、実はおおもとのつながりみたいなものが仕切っていたという実感がある。

小学校低学年の頃、奮発した家族旅行みたいな感じで東京から山口県の寺にある父方の先祖代々の墓参りに行ったことがある。最初のきつかけ、予兆はたぶん山口のその寺からの通告を聞かされた時だったかもしれない。

私の父は姉2人兄2人の5人兄弟の末っ子だった。しかし兄2人の家庭は女の子しかおらず、家を継ぐ唯一の男子として私の存在があった。私自

身はそんなことはほとんど意識しておらず、「家を継ぐ!」などという訳の分からない世界には距離を置いていた気がする。ただし、祖母が(孫の私の)墓守の費用の足しにと、なにがしかの金を両親に渡していたことを聞いて、将来、何事かはあるのだろうかという意識は頭の端っこにはあったようだ。

多分30歳を過ぎた頃のある日、実家に何でだか立ち寄った折、両親が本気で怒っていて、私には入れません。長男の家系が墓を引き継ぐのです」と言われたという。つまり嫁入りして苗字も変わってしまったという伯父の娘の家系が墓を引き継ぐので、あなた方は別に墓を探せということなのだ。両親がびっくりしたのもうなずける話だ。(後日、両親は別途墓所を買って、今はそこに眠っている)

私自身は、その時はまだ、寺だの家系だのはくだらない世界の話だという考えの中にいたので、確かにひどい寺のやり方だと感じたが、まあどうでもいいことだ、ぐらいにしか認識しなかった気がする。ただ、いわゆる家系とかそういうものが、それが何だということではなく、単なる歴史的事実として興味の対象となる引き金だったのは、偶然というか必然というか……。

* * *

とにかく何故か系図というものを作り出したところ、これがなかなか面白い。暇をみては戸籍等の資料を集め整理などしているうちに、それなりに格好が付いたものが出来上がってくる。そして

それらは、明治維新の頃からのそれぞれの暮らしぶりを想像する(本当にかつてに想像するだけなのだが)ことにつながり、そこに重さを感じられるようになる。どうでも良い暇つぶしのお遊びが、ずっしりとした存在感を持つようになったのである。

父方母方、連れ合いのものも入れて4方面廻れば、蝦夷の開拓民やら船大工の息子やらがいて、それぞれの時代の政治経済事情を想起させてくれる。そして、祖父が軍人だったのは知ってはいたが、それこそ長州藩の根っからの軍人で西南の役でも西郷軍と戦ったなど知った時は、暴力、戦争大キライの私にとって何かぐさりと来るものがあったし、贖罪と言うと大きすぎだが、何かそんな気分が起きたのも事実だ。

そんなこんなしながら時をすごうちに、人生いろいろな事が起きだして、今思えば本当に信じられない偶然の連鎖というか必然的帰結というか、とにかく、それこそ昔は頭の中で「敵」としていた伊勢神宮に何度も足を運ぶことになったり、いくばくかの学校物理化学ではありえない体験をしたり……。いつの間にか現在の現実空間とは別の次元、空間の存在を当然あるものとして生きている私になっていた。

「先祖」による「因縁」みたいなものが、かなり大きな要素としてそれぞれの人生に関わっているのだという感覚、納得がある。だからどうだということではないが、何かの折にそこへ想いを寄せ、祈ったりするのは気が落ち着くというか、余分な雑念が消えていく感じがしている。

別の次元、空間と言ったが、実は全く同一の世界であり、表というものがあれば裏というものも必ずある、みたいな話で、霊の世界を考慮に入らずに現実世界を営んでいくと、だいたいろくなこ

とがない、と結論している私がいる。彼ら、または宇宙意識というようなナニカが我々を見て、手を差し伸べ、関わってくれていると感じられるのは本当にありがたいことだ。

例えば、私には武おじさんという大叔父がいた。軍人の兄の回りで遊び人として生きていたらしい(もちろん会ったことなどない人だ)のだが、ある時から妙に親しみを感じるようになって写真を飾ったりしている。私が生まれる5年前に他界された人だ。ある意味、完全な自作妄想なのだが、何故か近くにいる助けられていてる感覚がある。本当にありがたく思う。

そんなこんなで、江戸時代末期ぐらいまでの距離ならば、先祖の存在を暮らしぶり等も含めて想像もできる。それが、今の自分の在り方とどう関わっているのか、つながっているのか。なかなか興味深い妄想の旅ができる。

また、諸々のご縁の中で藤原秀郷さんという歴史的に有名な人物が先祖の一人であることを知っていた。しかし平安時代までとなると、つながりの実感は全く持てないでいた。ところが、大倭との関わりの中で平将門さんが現れる。この辺の話は、以前林修三さんがここに書かれているとおりで、因縁御縁とはすごいものだ。本当に何から何までひとつにつながっている。(※注)

※注(一)『おおやまと』平成28年6月号

「大倭そして戸隠とのご縁」(冬崎流峰)、参照

※注(二)『おおやまと』平成28年11月号

「新皇教宮の和の光」(林修三)より以下引用
▼平成26年、佐渡の「賑栄い塾」で林修三さんは、たまたま冬崎流峰さんの隣に座った。

《…略… 数日後に行く予定だった大倭文化行事の…行き先は「新皇教宮」であり、…恐らく、

平将門公についてそれほど興味をお持ちではないと思われた流峰さんにも語りかけた…その時、思わず耳を疑う言葉が流峰さんの口から語られました。「実は…調べてみると僕自身も秀郷公の末裔である事もわかったんだよ」。

秀郷公と言えは…将門公を討った武将です。▼平成28年8月、林さんと岸田哲さんは、戸隠に冬崎さんが手作りした別荘に誘われた際、一緒に新皇教宮を訪ね、櫻井さんご夫妻を迎えられた。

《将玄坊大善神(法主様の付けられた平将門公の法名)をお祀りしている本殿の、向かって左側に、通常はない「正覚坊大善神」の祭壇が設けられていました。…法主様の亡くなった後、書き遺されていたことがわかった藤原秀郷公の法名です。…「和の光」に包まれる様、祈りを捧げました。》

* * *

そして、当然のことながら本当にたくさん先祖の人々が、壮大なスケールでとつともなく古い時代からつながっている。このつながってきいている世界を、今現在の、ここ100年ほどでどっち上がってきた文明社会というものと並べ置いた時、とんでもないずれを強烈に感じてしまう。

このずれ、この感覚が「先祖」「因縁」「ワールド」へのさらなる導入口になっている気がする。W e b 3 . 0 (※ウエブスリー次世代インターネット)などというこの文明開化も、本当はそういった霊的世界と深くつながっているはず…。

人生とか人間というものをすべて分かっている絶大な力を発揮できる偉大な神様・教祖様の存在というものの不信感、嫌悪感。それらによって、いわゆる宗教ひいては霊界に距離を置いていたことによるたまっていた何か。それらの反作用、強烈な揺り返しがある時期から始まって、今の私

の、何となく濃い思い、意識を呼んでくれたのかもしれない。

何だかえらそうな御託をずらずらと並べ立てた。が、言うほど霊的な時間を持っていかると言うとほとんどないと言ってもいいかもしれない。朝瞑想するのは習慣になってきたが、これもどちらかという健康のためにやっているようなもので、全く霊的な日常生活はしていない。流れの中で、折々そういった世界に意識がいく。

* * *

この稿の依頼みたいなことかも含めて、様々のご縁つながりがきつかけで、その瞬間瞬間、現れてくれる、感じさせてくれるナニカがある。それが今を生きる糧になっている。そんなところだろう。

諸々感じていて、いろいろな人に伝えたいと思っていたことは、この『おおやまと』紙の新年号特集、「あなたは暮らしの中で宗教をどう生かしていますか?」の中で皆さんがすでに充分書いておられる。本当に皆さん素晴らしい。

来た流れには乗る。来た話は受け入れる。ごちやごちやマインドで判断しないで素直に…:が今の私のモットー。なので受けてしまったこの稿。

そしてそのおかげでしょっちゅう「先祖」「因縁」ワールドを意識することになったこの2か月ほどの体験の中で、確実に得た大事な感覚が一つある。それは、きっかけ、導入口がものすごく大事なことだという感覚だ。そしてそれは、宇宙意識的何か(自然、先祖)がいつも提示してくれているのだという事実実感。安心感というか、何だそうなのかという事実は、消えることはないだろうし今一番大事にしたいものだという感想をもって、この稿を終わらせることにする。皆さんありがとう!

あなたは宗教を暮らしの中でどう生かしていますか？(その2)

尺八の音に晒される自分の心

奈良市 松本 太郎

毎月『とおやまと』、楽しみに読ませて頂いております。先月頂いたアンケートの質問が難しく過ぎて一か月頭を捻りましたが漸く言葉に出来たので、大変遅ればせながら回答させて頂きます。私が目に見えない存在に気づいたのは30歳くらいの頃、必ず100パーセント、絶対に死ぬという交通事故に遭った時です。頭からアスファルトに叩きつけられた瞬間、はつきりとした意識で「みんなさようなら」と思いました。気絶から覚めて全身の激痛が去った後、骨の一本も折れなかったと知った時、自分は絶対に何かに護られていると思えました。

それから20年位の歲月、『とおやまと』を毎月読んで法主様のお言葉にふれる毎にその気づきは確信に変わってゆきました。悪い事を考えると悪い事が起き、善い事を思えば善い事が起きる(何が善い事なのかは定義しにくいのですが)、世界はシンプルな原理で成り立っている事も学びました。

私の仕事は尺八の演奏なので心の状態が良くない時はすぐに音に出ます。瘦せた貧しい音になるのです。善い人のふりは一切通じない、厳しい厳しい道です。いくら言い訳しても一音出せば私の心は全て晒されます。

おほかで優しい音が出したいのですが神様に合格を頂く事はまだまだ出来そうにありません。よくこんな未熟者を生かしてくれているものだと思えば全ての人、自然に感謝する気持ちになります。やっぱり教義というものは無いのでこれを宗教と

言って良いのかはわかりません。

使命は死ぬ時に分かる？

あじさい色 青山 法義

宗教という言葉は今も私はなじみません。ただ、父曰元が大倭一筋の人だったため、大倭が嫌な宗教が嫌いという思いが強くなり、20歳頃、時間を作り仏教、キリスト教、カトリックなど教派、宗派を問わず回りました。結果どこに行っても言葉や表現が変わっても、根本は皆同じじゃん、「死んだ後の自分の世界を、生きてるうちにつくる」のかと自分の中で思うことが出来、これならどの宗教を信仰しようがしまいが、自分の心に正直に生きたらいいんやと。それで降は大倭を離れるわけでなく、どつぶり漬かるわけでなく、自分が出ることをしていれば良いんだと、今も自分が出ることをして生きています。

たまに、若い頃法主さんに何度も尋ねた、「自分の使命は」について考えることがあります。「死ぬ時に分かる」と言われたので考えない様になっています。

表紙絵によせて

宮城県仙台市 大沼久美子

10年、絵筆を握らずに過ごして、どんな時にも画材を捨てずに来たので、やはり私には絵が必要なのだと思った矢先、住んでいる地区のすぐ近くに、メガソーラー建設の話が持ち上がった。

どうも、宮城も再生可能エネルギー発電の利権に群がる業者に、狙われているらしい。昨年、蔵

王山嶺を望む川崎町で、風力発電事業に住民が反対をし、計画を撤回させたばかりだ。また、県北の鳴子温泉の風力発電事業が、結論が出ずにいる。そこに、仙台市太白区茂庭地区の里山に、メガソーラー建設計画だ。100ヘクタール東京ドーム21個分の広さに、10万1000枚のソーラーパネルを設置するという。隣に茂庭が団地があるが、その団地の広さと同じくらいの巨大なものだ。

休耕地に、ソーラーが設置されている場所はある。しかし、「木を切つて、山を崩してまでやる事ではない」と、地元の方が立ち上がった。大雨の後に、メガソーラーが壊れたり流されたりする事故の危険がある。有害な物質が流れ、土壌汚染の心配もある。再生可能エネルギーと言うが、ソーラーパネルはリサイクルできない。その話を、バードウォッチングをなさっている方から聞いて、私がやれることは里山で生きている動物や鳥の姿を描いて、SNSで流すことだと思ひ、それを始めた。100種類以上の野鳥が、観察されるそうだった。

「描く」という行為は対象物を「愛する」ことでもあり、描けば描くほど鳥が好きになった。もとより亡夫とともにでかけた先で、鳥の姿に慰められることが多く、大自然の存在は、ただ存在しているだけで人間を癒やしてくれるものなのだと思う。不思議なことも起きた。

クロジを描いた翌日、散歩をしていたらクロジが飛んできた。イソヒヨドリのことを調べたら、公園の椅子に止まっていた。ニホンカモシカが、団地の外れの土手を上がって来て、遭遇。しばし、見つめ合う。

野鳥を描くことになるとは、夢にも思わなかったが、私の野鳥愛は野鳥にとどまらず、すべてのことに対しての、優しいまなざしを野鳥たちに育てられたかもしれない。ありがたいことだ。

あじさい日記

12月28日夕〜30日夕 交流の家
 で今年は年末キャンプを実施。
 FIWC関東・東海・九州の各
 委員会とNAMASTE!とい
 うグループが参加しました。
 1月8日 午前9時半より西斎
 庭で大とんどが行われました。
 教長さんに代わり紫陽花邑代表
 の矢追明昌さんが「火入れ式」。
 恒例のぜんざいやフレンチト
 ースト、焼き芋等も楽しみまし
 た。午後2時から祝会が行われ
 ました。久しぶりに京都市伏見区
 の三宅博子さんが参加。
 1月12日 高橋良美さんに連れ
 られて奈良市西大寺町の文屋妙
 子・多紀子母子が大倭神宮に参
 拜の後、紫陽花邑に来られ杉本
 順一さんと歓談されました。
 1月15日 大倭神宮月次祭。
 1月19日 午前10時半から拝殿
 において大倭殖産(株)の事業関係
 者グループ「安全衛生協力会」
 の安全祈願祭が行われました。
 1月23日 大倭大本宮月次祭。
 2年ぶりに大和郡山市の植田
 作子さんが参加されました。
 1月24日 午後、拝殿のエレ
 ベーター点検。
 1月26日 午前9時前から瑞光
 院のガス配管工事。
 2月2日 午後、邑の女性達が
 教務本庁で玉緒祭用の豆煎り。
 2月3日 玉緒祭。この日の法

話は昭和42年2月3日玉緒祭法
 話でした。(本紙未掲載)

午前11時すぎ、奈良県桜井市

の佐久間裕樹さんの案内で京都
 市上京区の富永史葉子さん来
 邑。教務本庁で杉本さんが応接。
 2月4日 午後6時から大倭会
 館で大倭町自治会の役員会。

2月6日 大倭神宮月次祭。
 兵庫県加古郡の栗崎英樹さん
 の一家3人が初参拜。その後邑
 で林修三・杉本さんと懇談。

夜、大倭会館で邑倭の会。
 大倭安宿苑では

(菅原園)
 1月18日(通所) 新年会で絵馬
 作り。ぜんざいも頂きました。
 2月1日 コスメサークル。女
 性男性に限らず希望者に手のマ
 ツサージと爪にマニキュア。

(須加宮寮)
 1月2日 書初めを真剣に!
 1月19日 希望食事会。お寿司、
 中華、ピザを外注しました。

(長曾根寮)
 1月後半(デイ) フェルトで鬼
 や恵方巻等を吊り下げた作品作
 りをしました。

1月(特養) 日タリハヒリ体操
 口腔体操、クイズ、季節の歌等
 を取り入れていきます。

(茂毛諸園)
 2月3日 節分。昼食に恵方巻
 おやつには豆のお菓子でした。

(八重垣園)
 12月中旬から中止していたラジ
 オ体操を、2月から再開。

こたまとこたまと

岡山市 矢部 顕

岡山市の東隣の瀬戸内市に県
 立邑久高校がありまして、地域
 学の取り組みを行っています。

地域学は、いろいろな分野の探
 求学習の取り組みグループがあ
 るのですが、今年度の地域学の
 まとめの発表会である実践報告
 会が1月19日にありました。私

は5年ほど前から、この地域学
 の講師をしていますので、招待
 されて報告会に参加してしまし
 た。

全校生徒360人に向かっ
 て、それぞれのグループが発表
 を行いました。ここにお送りす
 るのは、私の関わっているハンセ
 ン病グループの報告で、映画

「NAGASHIMA」が「かく
 り」の証言」の監督の宮崎賢
 氏が取材し編集したものです。
 YouTubeで見ることがで
 きます。

2023・1・19「瀬戸内人
 権映画祭」実践報告会ドキュメ
 ント 岡山県立邑久高等学校

(映像ジャーナリスト宮崎 賢)
 この上映会について私は「瀬
 戸内人権映画祭を開催した高校
 生」を書いて、『むすび便り』
 2月号に掲載予定です。

令5・1・26

北海道小樽市 守谷明宏
 富雄丸山古墳で盾形の銅鏡が
 見つかったという記事を昨日の

朝刊で読みました。円形古墳と
 しては国内最大とあり、地図で
 位置関係を確認しました。

以前、大倭神宮の近くに長曾
 根彦の墓が人知れずあると聞
 き、大倭神宮に行った際に周辺
 を散策したことがあります。近
 くにそんな大きな丸山古墳があ
 るとは知らず行きませんでした。

埋葬者は誰なのか気になり
 ます。

こちらは大雪が続いていま
 す。写真は1月21日の自宅近く
 のバス停です。出かける用事が
 ありバスを待っていました。

50M先すら全然分らない。何
 か来たなと思ったらバスでした
 (笑)。雪かきももう少しの辛
 抱です。 令5・1・28



【編集部より・守谷さんの探し
 た神武東遷時の長曾根日子の墓
 は、奈良市大和田町の「追場彦
 の森」と呼ばれている所にある
 と、法主さんは昭和14年に発行
 した『金鶏の黎明』に書かれて
 います。そこへ文化行事で行っ
 た時の記事が、平成12年6・7
 月号『おやまと』にあります。
 丸山古墳はすぐ近くです】

岡山県真庭市 湯浅芳郎
 徳永進さんの「野の花あつた
 か話」が、本日、朝日新聞岡山
 版に載っていました。連載12年
 目のこと。平成30年に文化行
 事で野の花診療所を訪問した時
 のことを思い出します。

こちらは雪が1メートルぐら
 い積もっています。家族3人で
 風邪をひかないよう頑張ってい
 ます。俳句雑誌「樹林」を年間
 2冊10年間発行してきました
 が、そろそろ気力・体力を考え、
 3月分をもって終刊にしよう
 と思っています。終わり良ければ
 総て良しいこうと。俳句は勿
 論続けます。 令5・1・28

編集後記

▼「あなたは宗教を暮らしの中
 でどう生かしていますか?」は
 どなたでもいつでも! (春)

あんない

* 月次祭 (大倭神宮)
 3月6日(月) 午後2時より大
 倭神宮にて。

* 大倭会主催祝会
 3月12日(日) 午後2時より大
 倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭 (大倭神宮)
 3月15日(水) 午後2時より大
 倭神宮にて。

* 月次祭 (大本宮)
 3月23日(木) 午後2時より大
 倭大本宮拝殿にて。